

32 節. 「すると、イエスは言われた。『はっきり言っておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。』」

モーセは、申命記 8 章 3 節で「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった」と語り、マンナの本当の意味を説明している。このように、マンナが大切なのではなく、マンナとは区別した意味で神様の生ける御言葉で生きるということ、もっと霊的な糧が大切なのだということをも主イエスは言われている。そもそも「マンナ」そのものは、モーセが与えたのではない。モーセの時代に、神様が天から与え、40 年の荒れ野での生活を守り、導いたのである。

ここでの「マンナ」「パン」とは、人を生かす糧のことであり、荒れ野時代では肉体の命を養うものであった。

33 節. 「神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」

人を真に生かす「神のパン」は、「天から降って来る」。この「天から降って」という言葉は、ここを含め 6 章の終わりまで 7 回も出てくる(38、41、42、50、51、58 節)。

【NKJV】 "For the bread of God is He who comes down from heaven and gives life to the world."

主イエスは、「わたしはいのちのパンである」と言われ(35 節)、「わたしが天から降って来たのは」(38 節)、「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである」と言われている。

新共同訳においても、ここでの主語は、「神のパンは」という「パン」である。すると、「パン」は、ただ与えられるものではなく、パンそれ自身「意志」を持って行動する存在ということになる。この点、NKJV 訳の方は意味をよく汲んでいると言える。

34 節. 「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」という群衆の要求は、26 節で「あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ」と言われているように、食べた後排泄される「朽ちる食べ物」(27 節)、肉体の飢えを満たす「パン」のことである。ついでに 26 節の「満腹し」と訳されている言葉(χορτάζω、コルタゾー)は、家畜、動物が餌を食べて満腹する時も用いられている(ルカ 15:16、16:21)。

35 節 a. 「イエスは言われた。『わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。』」

【TEV】 "I am the bread of life," Jesus told them. "Those who come to me will never be hungry; those who believe in me will never be thirsty.

【NKJV】 And Jesus said to them, "I am the bread of life. He who comes to Me shall never hunger, and he who believes in Me shall never thirst.

肉体の飢えを満たしてくれるパンを求める群衆に対し、主イエスは「**わたしが命のパンである**」と言われる。人を生かすという意味において「**パン**」は、無くてはならないものであるが、主イエスが言われる場合、それは人を霊的に生かすものという意味になる。この後の 52 節から 55 節には次のような主イエスの言葉が記されている。

「それで、ユダヤ人たちは、『**どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか**』と、互いに激しく議論し始めた。イエスは言われた。『**はっきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。**』」

「**決して渴くことがない**」。この言葉はサマリアの女に語った言葉を連想させる(4 章 13-14 節)。また 7 章 37-38 節や 19 章 28 節も参照。

36 節. 「しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見ているのに、信じない。」

この場合の「見る」とは? 「信じる」とは?

この問答の前日に、主イエスが男だけで 5000 の群衆に僅かのパンと魚を分け与えて満腹させるということがあった。その時、「**人々はイエスのなさったしるしを見て、『まさにこの人こそ、世に来られる預言者である』と言った**」(14 節)。そして、主イエスを「**王**」にしようとした(15 節)。つまり、彼らは僅かなパンと魚を無限大に増やすことが出来る人こそ自分たちの王に相応しいと思った。あるいは、そう信じた。そのようにして「**しるしを見た**」。しかしその翌日、彼らが主イエスを捜し求めて来た時、主イエスはこう言われた。

「**はっきり言っておく。あなたがたがわたしを捜し求めているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」**

ここで言われている「**食べ物**」とは、「主イエスを信じる信仰」のことである。その信仰を持たずに、しるしを見ても、そこで見るべきものを見ることが出来ない。だから、主イエスは、あなたがたは「**しるしを見ていない**」と言われる。つまり、主イエスが見て欲しいと願ったようには見ていない。「見る」ということも、単純なことではない。私たち人間が「見る」こと、見て理解すること、理解したと思っていることは、主イエスからし

てみれば、何も見ていない、何も理解していない、分かっていないということにもなりかねない。その分かれ目に「信仰」がある。

37 節. 「父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない。」

「わたしの所に来る」とは、「わたしを信じる」と同じ意味。父が主イエスに与えた者は皆、主イエスを信じるということになる。逆を言えば、父が与えない限り、誰も主イエスの所には来ない、信じない、ということでもある。65 節の「父からお許しがなければ（与えられていなければ）、だれもわたしのもとに来ることは出来ない」とは、こういう意味であろう。

ここに語られていることは、「信仰は神様に選ばれた者に与えられる」ということである。自分で求めて、自分の力で獲得するものではない。神様に選ばれた者だけが、主イエスの所に来ることが出来る。言葉を変えると、私たちの信仰は、神様の恵みによって与えられたものであるということ。だから、確かなものである。私たちの内には信仰の根拠などない。私たちが自らの意志で信じたのではない。私たちが救いたいという神様のご意思が先にあり、そのご意思に基づいて私たちが選ばれて、私たちは信仰を与えられているのである。

ある牧師がこの箇所に関して、次のように書いている。

「ここでは信仰そのものが神の恵みであることが示される。ここでは信仰は神の選びの結果であり、逆に神の選びは信仰によって現実化することが明らかにされている。ここでは、群衆の不信仰は神の拒否への予定だということが言われているのではない。予定の教理の根本は、信仰とは信仰者自身の力ではなく、神の決意の実現であり、それ故に信仰は確かな根底をもっていることを示そうとするものである。」

信仰は、神様が与えてくださるものであるが故に、信仰者は些かも誇るものを自らの内には持っていない。しかしまた信仰は神様が与えてくださるものであるが故に、この世がどうなるろうとも、私たち自身がどうなるろうとも、いささかも揺らぐものではない。神様を起源とする信仰、希望、愛はいつまでも残る。そしてまた、神様の選び、その決意はいつ実現するか私たち人間には分からぬ故に、今この時、主イエスの言葉に躓き、主イエスから離れ去り、ついには主イエスを殺すようなことをしてしまったとしても、その人々もまた、いつ、神の招きを聴き、主イエスの許に来る者とされるか分からない。

「わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない。」

【TEV】 I will never turn away anyone who comes to me.

「決して」は強意 (never)。

60 節以下には、主イエスのもとに来た人々が「**実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられよう**」と言い、66 節「**このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった**」とある。主イエスの許を離れるのは、人々が自分たちの考えと違うと判断したからである。主イエスは「**決して追い出さない**」。

38－40 節.

「**わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。**」

「**わたしに与えてくださった人を一人も失わないで**」。主イエスは最後の晩餐の説教の後、「**わたしは彼らと一緒にいる間、あなたが与えてくださった御名によって彼らを守りました。わたしが保護したので、滅びの子のほかは、だれも滅びませんでした**」と祈っておられる(17 章 12 節)。

主イエスをお遣わしになった方(父なる神様)の御心とは、ペトロをはじめとする直弟子たちだけに向けられているのではない。「**終わりの日に復活させる**」という言葉が示すように、世々のキリスト者(「キリストに属する者」という意味)全員である。

「**終わりの日に復活させる**」(【NKJV】 I will raise him up at the last day.) という言葉は、40、44、54 節と繰り返し語られている。主イエスが与える救いは、終わりの日に復活させ、永遠の命に生きるようにすることである。主イエスを信じる者を「**終わりの日に復活させる**」ことが父なる神の御心であり、父の御心に従順である主イエスの成すことである。38 節から 40 節の間に「**神の御心**」(【NKJV】 the will of Him who sent Me) が 3 回も語られていることの意義を重く受け止めたい。